

編集兼発行者

千葉大学医学部

みのはな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線208

千葉大学医学部同窓会報 第60号 題字 鈴木五郎

学長就任に当って

千葉大学長

香月 秀雄

六年振りにいろいろの思い出のある学長室に帰って来ました。そこは一見平和で静かに見えます。土気色の砂塵が舞い上り、素漠としていた六年前の西千葉のキャンパスは今緑に覆われ、駒を並べた様な校舎が整然と並び、休みのため学生の姿は勿論、教官の姿もほとんど見えません。ざらざら照りつける真夏の太陽の下で、クレインがうなり、ブルドーザーが走り廻り、身動きのできない程の自動車の間を忙しく人が行きかっている亥鼻のキャンパスとのこの違いはどうしたことかと驚きます。

新制千葉大学のメインキャンパスは、一つの活動期を終え、亥鼻のキャンパスは二期目の活動期に入っているともいえます。しかしそれより、それを構成する部局の性格が間合いを置いて、静と動との違いを現わしているのかも知れません。

人の命を学問の対象とし、流れてゆくものに追いますが、とうとう医学の持つ性格が、常に動的であり、尖鋭であることは当然でしょう。しかし、静かに、平和に見えているものが非活動的であり、成熟していると考えことはできません。一見、静なるもの、一見、動的なものを一つの総合大学として、そして機能する組織体として融合

させることが、どの様に困難なことであるかを私は知っている積りです。

医学部の諸君が千葉大学の柱としての自覚と自省を持って、他の部局に、特に新しく亥鼻のキャンパスに設置された看護学部・活性研に大らかな気持を持って対応さ

れ、同じキャンパスの中で総合大学ならではの成果を示されるように切望しております。

単なる迎合は腐敗に繋がりますが、排他、狭量は避えることのできない萎縮、退行に連がることを吾々は知っています。

静かに、しかも活動的な医学部の限らない発展のために、教職員学生諸君が学部長、病院長を中心として、協調し、精励されんことを心から願っております。

昭和五十一年八月一日



大学本部屋上にて

みのはな同窓会

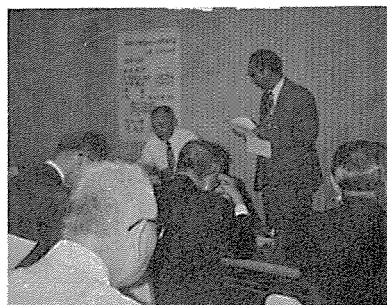
昭和51年度総会開かる

昭和五十一年度あのみのはな同窓会総会は、七月二十四日駅ビルで開催された。会には有益常任理事の司会が始まり、まず大塚会長の挨拶

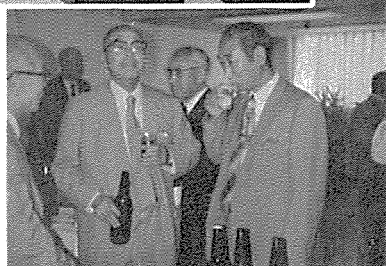
するようにしたい。東京支部ではすでにこれを始めている。と前向きな発言。

香月医学部長からは、新病院の建設状況、看護学部の発足と新学舎の落成、生物活性研のあのみのはな地区への移転などについて話され、昨年から今春へかけての学生の

総会議事



懇親会



騒ぎについても、無事終了したところなどこまかく報告された。ついで井出常任理事から会務報告があり、常任理事会、役員会、編集委員会等年間の同窓会活動、昨年五月の木更津のみのはな会に始まり、今年七月の茨城のみのはな会まで十二回の支部総会に、本部より延三十三名の本部役員が連絡に伺っていたことなどを報告。

物故会員(明39卒野津勤六氏ほか五十三名)に黙祷を捧げた後、議事に入り、昭和五十年度決算、五十一年度予算、百周年記念事業特別会計についての報告および提

案が萩原常任理事よりあり、佐藤会計監事よりの監査報告もあつて一括承認された。なお今年は新名簿の発行の年であり、意外と費用がかかったため、なるべく多数の方の購入を希望する旨の発言、同窓会館新設の促進、役員の若返りを計れ、組織造りを更に強化するようにとの要望など、活発な討議があつて議事を終了。

閉会後直ちに田那村常任理事の司会による懇親会に移り、遠来の大塚三八雄氏の特別発言などあつて和気藹々裡に散会した。

昭和五十一年度秋の叙勲

勲三等旭日中綬章

宮内義之介(千葉大学名誉教授・昭和六年卒)

紫綬褒章

岡林 篤(千葉大学名誉教授・

東大昭和十年卒)

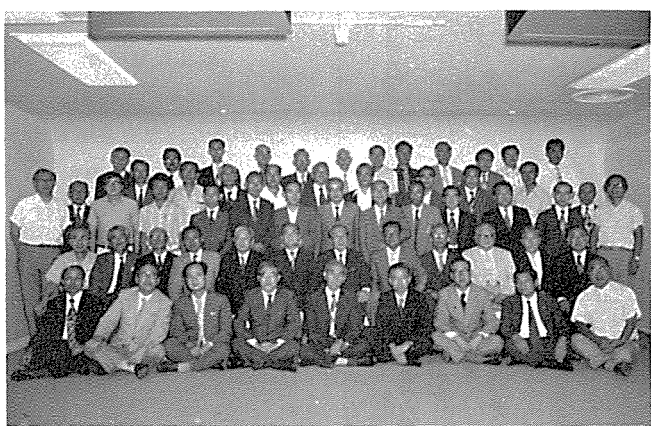
勲五等瑞宝章

長谷川武明(千葉県八街町・大正九年卒)

静岡ろのはな会開かる

(大塚三八雄支部長・勝呂 安幹事)

八月二十一日(土)午後二時より五年ぶりに沼津駅前沼津軒にて開催、本部より大塚文郎会長、香月新学長、相磯前学長、三輪名誉教授、萩原(脳研)教授出席、会員一七八名中一〇〇名近く出席大塚会長、稲垣教授、学長は先づ顧問となつて沼津市立病院を訪問、井手沼津市長、院長、大津外科部長(23卒)永井内科部長(34卒)中山胃腸科部長(37卒)松原整形外科部長(34卒)瀧野婦人科部長(37卒)大塚支部長、勝呂



千葉大学医学部 ろのはな同窓会 静岡県支部総会
S51. 8. 21 於 沼津軒

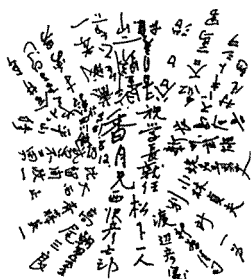
※ ※ ※ ※ ※

の内散会した。翌日の中山先生の戸田港の釣りの狩野川の鮎釣りも大漁で充分実力を発揮されて御帰宅された。(勝呂 安 記)

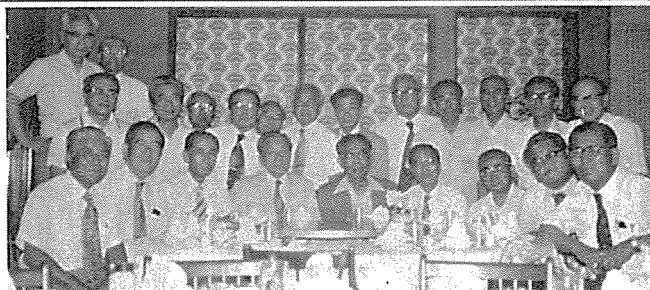
あすなろ会使用い

戦い將にたけなわになろうとしていた昭和十六年三月に卒業した若者達は殆んどが大学をよそに海に陸に征かざるを得ませんでした。その生き残りの者達の集り、あすなろ会と称して、今は楽しい集りを持って居りますが、今年初夏に定期の会がすんだばかりでしたが、会員にうわさが流れていた、級友香月兄の学長就任が八月に実現し、会員の誰れ彼れから学長就任祝いの臨時あすなろ会を開こうとの声が湧き上り、早速に東京幹事の新井、鈴木両兄が動いて下さつて、八月十二日、新橋の四

川飯店で定期会をしのぐ多数の出席のもと、蛭名兄の開会の辞で、盛大なお祝いが催されました。過ぐる年の学長代行の御苦労を追憶したり、更らにあらためてこれからの御苦労をねぎらい、折しも級友武宮兄の御子息の本因坊位獲得の喜びの話も出たりで夏の宵を各々かなりの出来上り方で御機嫌のうちに喜びの会を閉じました。写真は級友西沢兄が撮つて、千



葉幹事の鈴木秀男兄が御尽力下さいました。(朝岡 至 記)



昭和四十二年 卒業生同窓会記

医学部卒業以来、早くも十年目を迎えたのを機に、久しぶりの同窓会を催した。八月七日、千葉駅前コックドールに集まつたのは山梨より駆けつけた門馬公経君(外科)や栃木から来葉した本田陸

人君(外科)はじめ総勢43名であった。欠席者の中には外国留学中の者が八名含まれていた。伊佐治尚文君(眼科)の開会の挨拶で始まり、順次各自の学生時代の思い出話や、その後の各方面での活躍の自慢話等に花を咲かせ、あつたいう間に三時間半を過ぎしてしまつた。学生時代にくらべ、皆少々中年太り気味であつたが、開業して多忙な高田功君(産婦人科)だけは痩せて皆を心配がせられた。頭髪が薄くなり始めたり、白髪が目立つてきた者が八名程いた反面、いまだに独身生活を謳歌している者が二名いたのは、皆がうらやむやら感心するやら、当日出席した冠本敦子(眼科)、能勢晴美(眼科)および森田喜崇子(小児科)の三女史は、皆から相変らず若くしてお美しいといわれ、しごく御満悦の様子であつた。

幹事の能勢忠男君(脳外科)と守屋から、昨暮に脳内出血で倒れ、現在リハビリテーション中の金木良男君(眼科)の現状及び今

土井教授(岐阜大学) 就任
海野教授(旭川医大)

土井偉彦氏(昭33卒)は去る四月に岐阜大学医学部放射線科教授に、海野徳二氏(昭33卒)はこの十月に旭川医科大学耳鼻科教授に榮転着任された。土井教授は市川平三郎国立がんセンター病院長(昭23卒)のよき協力者であつた人また海野教授は和歌山医大耳鼻科奥田稔教授(昭26卒)のもとで助教授をつとめていた。両氏は同級生である。

後の対策について説明があり、今後共クラスとしても出来る限りの援助を惜まないこと、また、次回は四年後に平賀一陽君(麻酔科)にお骨折り頂き東北地方で開催する予定などを決め、三々五々夜の千葉市内へと散つていった。(整形外科 守屋秀繁記)



名簿の訂正

◇8頁 熊谷 合
◇107頁 齊藤 弘先生の電話番号
〇三一三五一―二八四五を
〇三一六三三―二四一七に訂正
◇岩間定夫氏(昭23卒)物故会員欄に入つてますがご健在です。
清水市宮加三七六四 県立富士見病院
お詫びして訂正します。

座談会

「肝炎をめぐる最近の話題」

とき 昭和五十一年八月三十一日
ところ 千葉市中央コミュニティセンター

司会

奥井 勝二 講師(第一外科)
岩崎 勇 助教授(第一内科)
小藤田和郎 助教授(第一内科)
野口 照義 助教授(中央手術部)
他編集部より村山智、鍋谷欣市、
齊藤弘、金子敏郎、徳永叔(写真
担当)

村山 肝炎の問題は現在色々議論されているところであり、千葉医学会でも本年は東北大学の石田名香雄教授をお招きして特別講演を願うことになっており、本来ならば千葉医学会雑誌でとりあげることでしようが、あえてのはな同窓会報でこの座談会を持ったことはHB抗原のことが最近各方面で話題になっており、同窓会員は若い人からご年配の方までおられますのでよく肩のこらない内容でわかつて頂いたらどうだろうということが編集委員会で話題になり、この座談会を開くことになりました企画を推進してくれた奥井先生に司会をお願いします。

奥井 村山委員長長からのご指示です。そのような趣旨になるべく沿うように努力しますが、私自身も不慣れで勉強も足りませんのでよろしく願います。先づ最初に定義についてですがオーストラリア(Au)抗原とか、HB抗原とか言われていますが、その辺から小藤田先



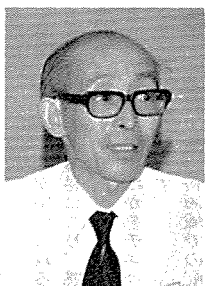
奥井 講師

生解説願います。

小藤田 一九六四年 Blumberg が「この人は遺伝学者ですが偶然の機会にオーストラリアの原住民の血清と反応する物質としてこのものを最初に発見しましたので、それをAu抗原としばらく呼ばれていました。その後その名称について討議がかわされ、現在はHB抗原と呼ばれることに統一されています。この抗原はB型肝炎ウィルスの感染 marker と考えられ、さらにそれがB型肝炎の表面(Surface)を被う蛋白であることがわかり、HB抗原と呼ばれることになりました。そしてB型肝炎ウィルスは Dane 粒子と呼ばれる直径42 nmの

球形粒子そのものと考えられ、その中心に27 nmのCoreがあり、これをHB抗原が覆っている。CoreはDNAを内蔵していることも分つて来ました。奥井 次にHB陽性なる場合の臨床的意義を説明して下さい。小藤田 HB抗原が血清肝炎や輸血と全く関係ない流行性肝炎にも見出されるようになり、にわかにウィルス性肝炎とHB抗原との関係が脚光をあび、各国でHB抗原が広く検査されるようになった。ところが検査してみると、健康な人にも一〇〜二〇割で検出されることもわかり、これは Asymptomatic carrier とか healthy carrier と

全く異常の認められないものを、healthy carrier としております。両者の間に感染性に対する差があるかないかは未だ明らかとはいえないが、つい最近生検、肝機能検査でも全く正常な人からも発症する様な症例があったとかいう報告を聞いています。奥井 どんな疾患に陽性に出ますか。小藤田 勿論急性肝炎が多く、それも早期に調べると八〇〜九〇％の陽性率といわれていますが、検査の時期によっても差があり、我々の処では約四〇〜五〇％というところ。慢性肝炎活動型では三〇％位で、肝硬変では慢性肝炎の活動型と同じ位の頻度で出ています。原発性肝癌になると種族によっても異なりますが四〇〜五〇％とやや高い頻度に検出されています。その他ダウン症候群、白血病、再生不良性貧血にも頻度は少ないが陽性になることもある。



小藤田 助教授

村山 ダウン症候群で陽性になるのはどういう意味ですか。小藤田 抵抗力が落ちていて感染し易いのではないのでしょうか。奥井 輸血との関係は如何ですか。小藤田 輸血との関係では意外に輸血の既往のある者にそれ程高くないことも判明して来ました。母親を介して子供に出る垂直感染が水平感染より多いとされ、大久保病院で陽性の母親から子供に高頻度に感染したと思われる症例が報告されています。齊藤 その子は healthy carrier ですか。小藤田 生検をしてないからはっきりしませんが、中々消えにくいことは確かでしょう。ただe抗原を有している母親からの子供はHB(+)になる頻度が非常に高いことです。奥井 一度HB(+)になったら(-)にならないですか。小藤田 急性B型肝炎でHB(+)例のなかで、長く消えない人と回復に向つて消える人とありますが、長く消えない人は慢性化し易いというのが定説のようです。奥井 次にHB抗原は肝細胞の中に形態学的にも証明されているとの事ですが、その辺を岩崎先生お願いします。

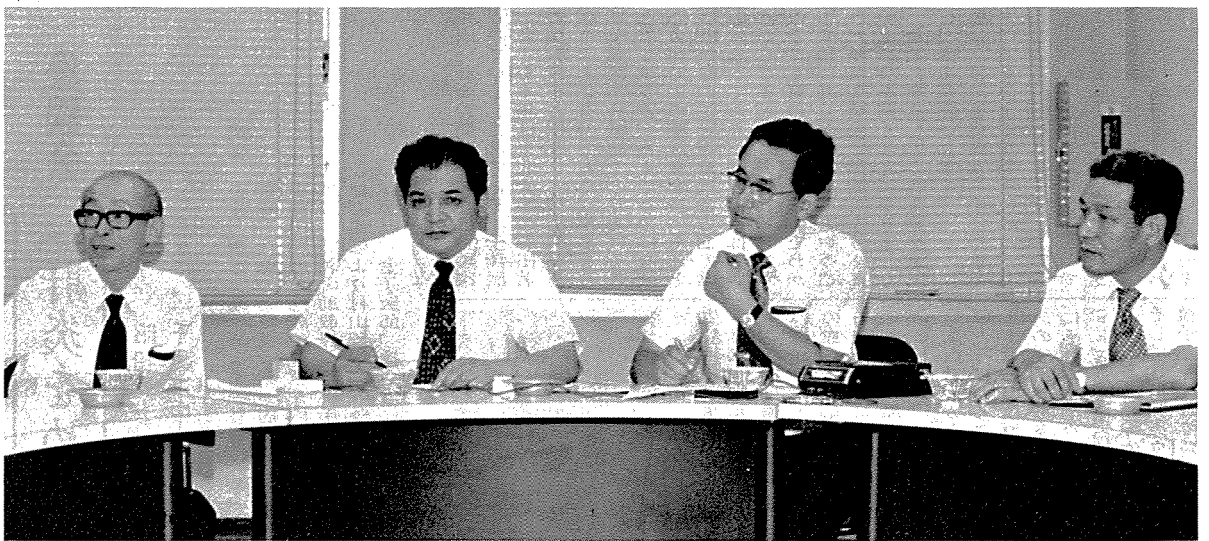
岩崎 東京大学の志方先生の仕事ですが、今から五十年前の長与先生の肝硬変・肝癌の仕事に使用された肝臓の肝細胞の中に、オルセインを使用した染色法で染まる物質があることを報告し、それが蛍光抗体法で蛍光を発する箇所とほぼ一致しており、昔から肝炎↓



野口 助教授

則として手術日を決め(金曜日としている)、その手術場はその後翌日迄は使用しないようにして消毒を完全に行なっている。また腹腔鏡検査、肝生検も手術場で行なっていますが、これらの症例のうち一八％はHB(+)という数字が出ており、手術室内でこの様な操作や検査を行なっている病院では十分注意が必要と思われます。奥井 内視鏡検査に際しては、どんな配慮が必要でしょうか。小藤田 唾液その他の体液では、抗体値が低いので先づ問題はない

肝硬変・肝癌などにウィルスが関与していたのではないかと問われています。奥井 現在千葉大学附属病院では期待的手術をする患者さんには、先頃からすべてHBとワッセルマン反応を検査していますが、野口先生そのデーターをお示し下さい。野口 現在大学病院では年間約四二〇〇例の手術が行なわれておりますが、その中でHB(+)の患者は大体三％前後であります。これに対しワッセルマン反応陽性は四・七％程度となっています。HB抗原陽性の血清・〇・一ccの注入でも感染するといわれており、手術部では普通の感染症とは別に考えており、従つてHB(+)の患者の手術は原



(小藤田氏)

(岩崎氏)

(奥井氏)

(野口氏)

奥井 現在内視鏡検査のとき生検が広く行なわれており、出血しますので感染の危険が予想され、内視鏡検査の場合もHB抗原を調べる必要があるとされています。

岩崎 病理学教室ではこれまで多数例の急性肝炎やその他HB陽性症例の解剖を行なって参りましたが職員は、抗原は陰性で、抗体を有している人が若干あります。しかし抗体をもっている人は臨床の教室にいた人にも多い様です。従って一部にはそれ程恐ろしくもないという感想を持っている人もいますが、しかし黄疸になったらおしまいだということで、非常に敏感になつていことも事実です。

野口 しかしながら第25回滅菌法研究会での話題でも、実験室内感染のケースがあったことは確かです。気をつけた方がよいと思われ、不顕性感染で知らぬ間に抗体が出来た人もいるのではないのでしょうか。

小藤田 先日大学で全職員を調べた結果では約二%が抗原(+)でした。国立千葉病院では約一%でした。外来患者にはどの程度調べる必要がありますか。

小藤田 全員に検査するのが理想的ですが、そういうわけにはいきません。検査室の方が手うすで困ってしまいます。勿論肝疾患の患者は全員調べています。

鍋谷 性・年齢差はありますか。

小藤田 性差には目立った差はないようですが、年齢差は昔からいわれているように二〇―三〇才代の比較的若年層に多いようです。

斎藤 東京都のB型肝炎に対する指導方針は可成りきびしいようですが如何です。

小藤田 可成りきびしいですが、年一回の検査では少ない。少なくとも年二回ぐらいは必要でしょう。特に手術場・検査室では三―四回必要という処でしょうか。

奥井 検査法は簡単ですか。また精度は。

小藤田 オーセル法が用いられるようになってから容易になり、感度もよい様です。データーを読むときとの検査によつたかをチェックする必要があります。

金子 耳鼻科・歯科領域での配慮は如何です。

小藤田 唾液からの感染はまあ大丈夫と思いますが、出血しているようなときは、気をつけないければならないと思います。

斎藤 職員の陽性者の対策は如何したらよいですか。

小藤田 肝機能検査をして、無症候性Carrierかhealthy carrierかどうかを鑑別する必要があります。BSPやICGのような負荷試験までやつて正常なら心配ないが、採血して肝機能障害がある場合普通生検をしてよい場合とそうでない場合と個々の場合によつて一概にいえませんが、一カ月に一度位づつ検査して行き六カ月位経過をみて決める必要がある。

鍋谷 肝機能検査で正常になり小藤田のは何ですか。

小藤田 やはりGOT・GPT・それとICGやBSPでしようが無症候性のCarrierで注意しなくてはならないのは、採血して肝機能

の検査がすべて正常でも、ICGやBSPを行なうと正常でないことがしばしばあります。

斎藤 勤務して悪い職場としては？

小藤田 疫学的に給食関係が問題でしょう。社会的事情を考慮して職場転換をはからなくてはならないと考えています。

斎藤 職場転換といつてもそうすぐ代理がいるわけにもいかず、実際職員で急性肝炎で死亡した例もある聞き、心理的影響が大きい強制的に検査させるわけにもいかない。

小藤田 実際的にはむづかしいようですが、HB(+)の意義をよく教育指導する必要があります。特に医師・ナースの場合は患者に接するわけですから、充分その立場を認識して対処する必要があります。e抗原が発見されるような血液は感染性が高いといわれており、事実慢性肝炎活動型にe抗原陽性例の多いことが認められていますので、現在ではe抗原まで調べる必要があるようです。

奥井 次に消毒の問題に入ります。一般的に次亜塩素酸ソーダがよいとされていますが。

野口 最も確実なのはオートクレーブによる滅菌消毒ですが、大切なことは滅菌または消毒操作をするのに、周囲に血液を散布させることによる汚染を防ぐことです。手術に使用した器械類は洗いがら滅菌出来るウオッシュャー・スライザーを使用すれば最も安全ですが、薬剤ではWHOや東京都B型肝炎対策委員会答申などにあ

れている次亜塩素酸ソーダとグルタールアルデヒドが確実で、実験的にはイソルガンDIP 300パコマ(両性石鹼)なども良いといわれています。

岩崎 病理解剖はご存知の通り重裝備でやっていますが、血液はホルマリンで洗って流しています。これではいけませんか。

野口 血液をホルマリンで処理し十分に水洗すれば大丈夫と思われま。逆性石鹼(オスパン)は抗原性は失われるが感染性は残っているといわれ、逆にホルマリンは抗原性は残っているが感染性はなくなるといわれています。逆性石鹼・アルコール・ヒビランなどはその有効性が確かめられていませんし、やはり確実なのはグルタールアルデヒドと次亜塩素酸ソーダです。ただ有効塩素酸濃度、1000ppmの次亜塩素酸は臭いも強く刺激性的で皮膚もあれ、手術器具など金属類を腐蝕させる。他方2%グルタールアルデヒドも皮膚や粘膜への刺激があり、使用上難点があるところに問題があるようです。ホルマリンガス・エチレンオキシサイドも有効で、大型のもの例えば布巾、ベッド、麻酔器、呼吸器などは、アゼプターとして一つの部屋位の消毒空間を作りこれらのガスを利用しているのが現状のようです。

奥井 話題はつきませんが今日はこれでとどめた機会をつくりましょう。

ありがとうございました。

独協医科大学だより

教授 上山 滋太郎

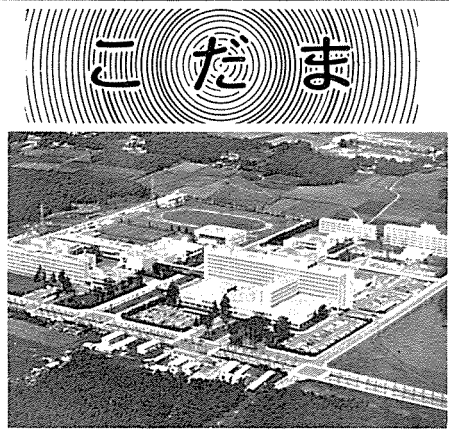
関東平野の北端、宇都宮市と栃木市の間にある壬生町に独協医大が開設されてから、早や四年が経過しようとしている。林と島を切り開いたところだけあって、緑と自然に恵まれ、四季を通じて鳥の鳴き声を聞かない日はない。遠く日光連山と筑波の山々を一望出来る人々の疲れを瞬時に癒してくれる教養・基礎、臨床が同じキャンパス内にあり、六年一貫教育の構想もようやく軌道に乗り、病院の方も入院五百床、外来患者千人が実現される日も近い現状にある。

当大学内のあるのはな同窓会員を紹介いたしますと、まず、臨床では、胸部外科に堀江昌平教授（昭23年卒）と測上隆助教授（昭36年卒）、簡喉期講師（大学院昭45年卒）がおられ、手術および術後管理に日夜没頭している。放射線科には堀越寛教授（昭31年卒）が赴任されたが、昨年の年末に脳出血のため急逝され、その早世は惜みても余りあるものであります。

その他、アレギー内科には鹿島孝（昭43年卒）と福田健（昭48年卒）、小児科には海野健（昭43年卒）の諸兄がいる。

一方、基礎には十三講座あるうちで同窓生が三講座の主任を占めそれぞれの教室の基礎づくりを終った段階にある。微生物には安村美博教授（昭26年卒）と丹羽章助教授（昭38年卒）が、第二解剖には下沢淳海教授がおり、私自身は法医学を担当している。

御承知のように、独協学園は明治十四年創立の独逸学協会にその端を発し、各界に指導的人物を送り出して参りましたが特に医学会には有名な医学者多数を輩出し、そのうちには小池敬事元学長の名も含まれております。こうした意味からも医科大学の設立の機運がようやく高まった昭和四十八年当



治十四年創立の独逸学協会にその端を発し、各界に指導的人物を送り出して参りましたが特に医学会には有名な医学者多数を輩出し、そのうちには小池敬事元学長の名も含まれております。こうした意味からも医科大学の設立の機運がようやく高まった昭和四十八年当

医科大学が発足したわけであります。人間性豊かな医師並びに医学者の育成、能力の啓発に重点をおく教育、地域社会の医療センターとしての役割と国際提携の三点を大学の基本的理念とし、教養課程から一貫性のある医学教育を試みております。講座の壁を破った総合カリキュラム制度を講

中央鉄道病院の近況

胸部外科長 長田 浩

座制と併置したことは、医学教育の一つの試みとして、内外からの注視を集めています。

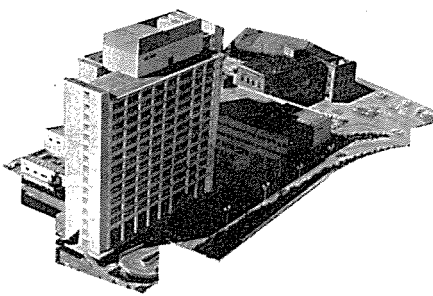
なお、栃木県には約百名の同窓の先生方がおられ、毎年恒例の地区同窓会が開催されており、心強い限りと感謝しています。

（筆者は昭33卒）

明治四十四年五月、麹町に国鉄共済組合経営の常盤病院が開設された。これがわれわれの病院の発端である。大正三年東京鉄道病院となり、昭和三十三年中央鉄道病院と改称し、現在に至っている。

今年は創立六十五周年であった。御存知の方も多からうが、新宿駅南口を出て、甲州街道を代々木方向に左折したところ、正面にツタのからまった都内でもほとんど見られなくなったオールドスタイルの病院は昭和三年に建設されたものである。

十数年前には近くに大きな建物もなく、国電からも良く見えたものだったが、新宿周辺の変貌ぶりはすざましい。副都心の中心に位置するこの病院も、旧態のままで済まされなくなった。昭和四十五年に新しい外来棟と中央診療棟が業務を開始し、今年度から本館の建設が軌道に乗った。三年後には写真のような面目一新の中央鉄道病院が出現する（予定である）



（一）外観のみならず医療の内容においても他に遜色のないことを願って、われわれは日夜努力を重ねている。現在上田英雄院長以下、医師八八名、研修医十二名、看護婦二一八名、全職員は約五〇〇名を算える。二科の一日平均外来患者数は約一一〇名、昭和五〇年度の入院患者数は計三三三五名であった。現在の病床数は四三〇であるが、本館完成の暁には六〇四床となる。

創設以来本院に在職した千葉出身者はきわめて多数であるが、現在十三名在職する。先ず別格と

して千葉保之先生（昭八卒）。今更いうまでもなく、日本の結核撲滅に偉大な貢献をされた先生は、昭和四十七年まで院長であり、その後も顧問として酔日登院され、われわれを鞭撻されて居られる。その他の面々は、吸器内科松本正治（昭十八卒）、一般外科兼国分寺分室長矢野寛敏（昭十九卒）、呼吸器内科近内康夫（昭二〇卒）、胸部外科長田浩（昭二〇卒）、リハビリテーション室佐藤和男（昭二六卒）、一般外科阿部章一（昭二七卒）、皮膚科永島敬士（昭三五卒）、形成外科小島和彦（昭四一卒）、循環器内科田中隆二（昭四七卒）、産婦人科大橋浩文（昭四七卒）、消化器内科江田千寿子（昭五〇卒）、リハビリテーション室鴨下博（昭五〇卒）。い

ずれも他大学出身者に伍して頑張っていることをお伝えしたい。学会などでの活動も怠らない積りで、日常診療に逐われてまだまだ充分といえないことを遺憾に思う。

このような病院においては、いわゆる学閥にとらわれることは望ましいことではない。しかし、大学との交流が余りにも過ぎたきらいがありはしないか。われわれの側にも責任はおおいにあるが、大学側でも考えて頂きたいと思う。同窓の諸氏にも是非お寄り下さるようお願いする。

（筆者は昭20卒）

第12回日本胃集
団検診学会関東
甲信越地方会
開催される

昭和51年9月25日（土）午後一時より表記学会が千葉市民会館小ホールで第一外科奥井勝二会長のもとに開催された。現在胃集団検診（以下胃集検と略）は胃がんの早期発見を主目的として各地で行なわれているが、この仕事は医師だけでなく、X線技師・保健婦・胃集検事務担当者等が一致協力して行なうことにより、初期の目的が達成されるわけであり、本学会の開催のねらいもここにあり、毎回これらの人々が参加して熱心に研究発表をしていく。毎年春秋二回各地で開催されており、代表世話人は国立がんセンター病院長市川平三郎氏が当っている。千葉県での開催ははじめてであり、その内容は一般演題12題・特別講演に順天堂大学白壁彦夫教授の「消化管X線診断の新しい展開」、シンポジウムは都立駒込病院西沢護博士の司会で、地域集検と職域集検の問題点、5人の演者の発表があり、会長講演は「千葉県における胃集検の実態と問題点」があり、その他に千葉県知事川上紀一殿、県医師会会長高木良雄殿、市川平三郎先生の挨拶もあり、参加者三百名を数え、盛会であった。

カリキュラム構成と評価のた めのワークシヨップ 開かる。

去る八月二十五日午後より、二十七日正午までの三日間、コンサルタントとして、その道の専門家である帝京大学耳鼻科鈴木淳一教授、順天堂大学医学教育研究室長吉岡昭正助教授に来ていただき、吉岡昭正助教授にお願いして、前記のワークシヨップを開いた。発起人は、米沢、本間、木村、村山教授と私(稲垣)、世話人は、牧野教授、小高助教授、植村講師と私、スタッフオースとして、本年四月イリノイ大学教育開発センターでトレーニングを受けた植村講師と一昨年十二月第一回医学教育ワークシヨップに参加した私があつた。参加者は、ほぼすべての教室・研究施設より一、二名、計三十一名(教授六、助教授八、講師十一、助手六)で、これを三班に分けて作業にあつた。このワークシヨップのねらいは、参加者がワークシヨップで得た経験をもととして、千葉大学医学部において、より良いカリキュラムを作成でき、生涯の医学教育(卒前、卒後、生涯)を推進できるようにすることにあつた。具体的な一般教授目標G・I・Oは、カリキュラム立案が出来るようになるために、①教授・学習の原則および教授目標作成のプロセスを理解し、②教授法と教育評価法の実践を認識し、③カリキュラムを立案する実践能力を習得することであつた。さらに、

これらの目標に対して、細かい個別的行動目標S・B・Oが立てられ、班ごとに演習という形で実際の作業が行なわれた。たとえば、カリキュラム作成演習では、プロジェクトとして、A班は、肺外科の外來実習、B班は皮膚感染症、C班は臨床検査学を取りあげ、各々について、まず終了時の目標をきちんと確立させた上で、これに到達するための数個ないし十数個の具体的行動目標を、学習者側に立つて理解しやすい言葉で明記する。ための教授方法を明確にした上で学習方式、学習場所、対象(人員、学年と教える時期)、メディア、予算、時間数、教官数などを表示する。さらに、学習表が教育目標に達したかどうかを確認するためテスト(前、中間、後)による評価もここに入る。以上のように、カリキュラムとは、単なる時間割りづくりではなく、それに対する方略を明らかにし、さらに目標に達したかどうかの確認までも含む全過程をいうものであることを、各人十分理解した。

ワークシヨップ終了時に、参加者に評価シートをくばり、意見をきいた。その中で、今回のワークシヨップの内容に対しては、回答二十七人中、きわめて価値があり十一、かなり価値があり十五、いづらか価値があり一であつた。また、このワークシヨップでえた教育学的方法を今後取り入れようと思うかの間に對しては、大いにとり入れたが四、かなりとり入れてみたいが十四、少しとり入れてみたいが九であつた。全体の印象に對しては、小グループディスカッションが行われ、かつ、教育が理論的に体系化された点がよかったと多く、一方、時間が足りなかった、用語が難解であつた、現在教育に一番責任のある教授の参加が少なかつたなど改善すべき点も指摘された。

三日間、コンパクトなスケジュールでもり沢山の内容を含んでいたが、参加者全員、非常に熱心に作業にあたり、かつ好評をえた点

評 なんでもやる科医人生

斉藤嘉一 著



この開催は一応成功であつたと思われ。(稲垣義明記)

とにかく明るく軽く、そして何ものかを深く蔵している随筆集である。何ものかは、一口に言つてしまえば愛情であり、詩精神であるが、軽快多才な筆致の行間から、それがそこはかとなく匂ってくるのが本書の特色である。

筆者は少くとも三代以上にわたつて市原市徳仁に在住する生粋の千葉っ子で、市原中学、弘前高校を経て千葉大学医学部を昭和二十四年に卒業、昭和二十五年に産婦人科に入局、昭和二十八年に医院を開業し、現在に至つてゐる。

「斜頸の思い出」「私の履歴書」を読むと、筆者の人生のハイライ

中には彼の珠玉の作品が、さらりと書き並べられている。

日向ぼこしては人恋う目をつむり
妹が居へ軽便鉄道杉菜生う
わが妻の色よく漬けし茄子かな
などの若々しい叙情から
初詣砂利滑ければ靴沈む
水馬いる静けさを釣つて居り
の静かな心境まで、佳句が多いが「私の履歴書」中にある
馬駆て牧のさくららの散りにけり
訪へば友秋刀魚焼く香をまとい
出づ
の二句は、それぞれ水原秋櫻子中村草田男に賞められたもので、彼の代表作といえよう。

本書の前半は「養老ズイキ夜話」「二膳物語」「しゃっくり虫の卵の話」など、実地医家としての経験談を語る十数の短篇が誌されており、面白い中に、簡単に笑ひ飛ばせないものを含んでいる。

本書のもう一つの特徴は、筆者を中心とした多くの人々の協力のあることであり、これもまた本人の徳の致すところといえよう。

恩師の序文、弟さんの「あとがき」、弟さんの奥さんのお父さんの装丁・挿絵と、本書には温かさがあふみわたっている。

詳しく内容を紹介するよりも、「はじめに」の中の数行を抜き書きした方が良さそうである。

「人生」は一篇の詩であるべきだと私は常々思っています。それが人情溢るる涙の詩であつてもいい、ユーモラスな笑いの詩であつてもいい、人生という白い紙に行動

●「列車が二十五分遅れて終着駅に着いた。降りる時、向う側の線路に雪片が舞い落ちるのが見えた。」(阪田寛夫・「ロミオの父」より) この号がお手許に届く頃、先生方のお住いのまわりに粉雪が降っている所もあり、今年もおしつまつていてしょう。とにかく一年、編集部一同心を合せて何とか発行しつづけました。来年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

●今度で本当によく手伝つてくれた多田美衣さんが大学本部へ転任されました。厚く御礼申し上げます。(村山)

次号(61号)は二月末に発行の予定です。

編集後記

計 報

というペンを使って詩をかこう、そう思つて過去五十年生活して来ましたし、これからは生きて行くことと思つています。

一読を切におすすめしたい好著である。(H)

菱木重嗣(明44卒)、本吉慶四郎(大2卒)、青木忠房(大9卒)、岩井弘行(大11卒)、石田重直(大13卒)、小杉宗平(昭8卒)、山本秀行(昭10卒)、奥山正次(昭12卒)各先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。